

Title	田中敏弘著 マンデヴィルの社会・経済思想：イギリス一八世紀初期社会・経済思想
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.7 (1966. 7) ,p.798(134)- 799(135)
JaLC DOI	10.14991/001.19660701-0134
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660701-0134">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660701-0134</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

田中敏弘著

『マンデヴィルの社会・経済思想』

イギリス一八世紀初期社会・経済思想

わが国におけるバーナード・マンデヴィル

にかんする研究は、河上肇氏によってはじめられ、上田辰之助教授による本格的な研究があらわれたことよって知られている。わたくしはかつて、戦時中、ひそかに河上氏の著作をよみ、そのマンデヴィルについての先駆的研究に、マルクス主義者として以上に、経済思想家としての氏に深い尊敬の念をおぼえたものであった。また上田教授の労作は、戦後の混乱期において、その含蓄にとむ文章と軽快な筆致は、読む者を最後までひきつけてやまないものがあつた。こうした業績の上に立つて、この度、田中氏によって、マンデヴィルにかんする本格的な研究がまとめられたことは喜ばしい。

つぎのような内容から成っている。

- 第一章 マンデヴィルの生涯と思想の形成
- 第二章 マンデヴィルにおける人間と社会
- 第三章 マンデヴィルとバークリー
- 第四章 マンデヴィルとシャフツベリ
- 第五節 マンデヴィルとアダム・スミス
- 第六節 マンデヴィルとアダム・スミス
- 第七節 マンデヴィルの経済思想
- 第八節 マンデヴィルとアダム・スミス
- 第九節 マンデヴィルとケインズ
- 補論 研究史の概観

普通にマンデヴィルといえは、例の有名な「蜜蜂の寓話——私悪即ち公益」という奇妙な題目をもつ書物によつて知られ、アダム・スミスの思想に非常に大きな影響を及ぼしたということが一般にいわれるが、しかしこの研究書をよむと、マンデヴィルのスミスへの影響は、そのような無媒介的な直線的なものではなく、実に複雑な経過を経たものであり、多くの屈折があることがわかる。すなわち、著者はつぎのようにいう。「マンデヴィルが、スミスの思想に重要な影響を与えたことはすでによく知られているところであり、

とくにスミスの経済的自由主義思想への影響は、著るしいとみられている。これに対して、マンデヴィルにより批判されたシャフツベリの倫理思想は、スミスの師ハチソンにより継承・発展せしめられ、スミスの思想形成にかなりの影響を及ぼしており、スミスの倫理学がシャフツベリ「ハチソンの流れをくむ」道徳感学派」に属したことは周知のことである。……なぜシャフツベリが倫理学者であり、かつそれに留まったに對し、マンデヴィルがたんなる倫理学者でなく、経済思想家として広い意味において、スミスの先駆者たりえたかという問題である」(一〇九—一〇頁)。ここにすでに問題はつくされているのであるが、マンデヴィルのスミスへの影響は、たんに経済的自由主義自由放任主義という思想的側面だけではなかつた。のちに、スミスの「国富論草稿」にあらわれ、やがて「国富論」の冒頭における「分業論」にあらわれている。すなわち、スミスは、ピンのマニファクチュアをとりあげているが、マンデヴィルの場合は時計製造業である。スミスが、マンデヴィルからいかに多くの影響をう

けているかを、われわれは本書から学ぶことができる。著者は、マンデヴィルとスミスの関係を、たんに、経済思想の面からだけでなく、シャフツベリとハチソンを媒介とする哲学的側面への影響についても充分な注意を払っている点、著者のひろく且つ深い学殖をうかがうことができる。経済学史および思想史の研究者の必読書といふべきである。

- (1) 河上肇『経済学大綱』(改造社、経済学全集第一巻)。
- (2) 上田辰之助『蜜蜂の寓話——自由主義経済の根底にあるもの——』昭和二六年。(有斐閣・四一年四月刊・A5・三〇四頁・一六〇〇円)

—飯田 鼎—

原 覚天編

『経済援助の研究』

最近経済援助の問題がふたび多くの関心をもつてとりあげられ、新しい角度から見直そうとする傾向が強くなつて現われている。かかる

新刊紹介

反省・新展開の要請をもたらした要因には、種々なるものがあるが、その主要なものは、第一回国連貿易開発会議における従来の「貿易よりも援助を」としてかわる「援助よりも貿易を」の主張に象徴されているように思われる。

すなわち、一九五〇年代における援助・資本中心のアプローチの仕方が、十分なる低開発国の発展成果を生まず、援助理念・援助効果・援助方法に関する再検討が要請されているとともに、従来の低開発国に対する外国援助の増大がその対外債務の累積を招き、多くの低開発国において対外支払能力がいちじるしい悪化傾向を示した事実に対する反省として、貿易と資金援助とを有機的に結びつけることによつてその外貨ギャップを解消しようとするいわゆる「貿易拡大のための援助」という考えの発展を示すものである。

そして、援助理念・目的に關しては、援助そのものを国家利益と国際協調のいずれに結びつけて考えるべきか、援助は経済的論理・合理性の追求にもとづくのではなくてむしろ別個の基準によつて考慮されるべきではないの

か、また援助効果に關しては、もっと効率的な資金配分を考慮し、いわゆる資本吸収能力ないし債務返済能力等のつつまんだ研究が行なわれ、さらに、多数国の経済成長モデルを用いて計量的に援助効果を確定しようとする研究等が生まれている。

このような援助問題に対する新展開を背景としつつ、本書は、アジア経済研究所の昭和三九年度の調査研究計画の一環として、原覚天教授を中心に、十八名のメンバーによる共同研究の成果をまとめたものであり、その中心的な目的は、「従来先進諸国によつて行なわれてきた経済援助が、供与国および被供与国それぞれにいかなる影響効果をもたらしたか」ということの検討と、今後における経済援助の政策決定にあつて規模・速度ならびにその性格をどのように考えるべきか」ということの研究にある」(四頁)。

とくに本書では、先進国側からの資金の流れの実態と、それぞれの機関別・項目別の資金の流動の目的意識を資料的に正確にとらえ、それとともに、援助効果および今後における援助の拡大の可能性とその方向について